

唐物語

ひかし、王子猷、山陰といふ所に住みけり。世の中の渡らひにはだされずして、唯春の花秋の月にのみ心をすましつゝ、多くの年月を送りけり。事にふれて情深き^三人なりければ、かき曇り降る雪はじめて晴れ、月の光さよくすまじき夜、一人起き居て慰め難くや覺えけむ、高瀬船に棹さしつゝ、心に任せて戴安道を尋ね行くに、道のはと遙にて、夜も明け月も傾きぬるを、はいならずや思ひけむ、かくともいはで門のもとより立ち歸りけるを、いかにと問ひ人ありければ、

「諸共に月見むところ思ひつれかならず人に逢はむものかは」とばかりいひて、遂にかへりぬ。心のすきたるほどはこれにて思ひ知るべし。戴安道は剡縣といふ所に住みけり。この人の年ごろの友なり。同じさまに心をすましたる人にてあむ侍りける。

昔元和十五年の秋、白樂天罪なくして江洲といふ所に流されぬ。その次の年の秋、入江のはとりに夜友を送りけり。松風浪の音を聞くに、愁の涙いと抑へがたし。かくて小夜も更け行く程に、空すみわたり月影波に隨へるを見るにつけても、我が身ひとりとは沈まざりけりと思ひ亂れつゝ、人も渚を物心ほそくて歩み行くに、浪の上遙に琵琶の調さまざまに聞えて、かき合せなどの有様世に類ひなき程なり。これを聞くに怪しき心抑へがたし。あま^一人武夫より

外に、誰かは又なさけあるべきとおぼえければ聲をゑるべにて、「誰の人に」と尋ね問ふに「我はこれあきびとの妻なり。昔よはひ十三にて、琵琶を習ひ得たる事世にすぐれたるき。みかどの御前にて一度調べしに、百の御ひきいでものを賜ひき。又みめかたちありがたく珍しき程なりしかば、見る人聞く人さながら思を懸け心を盡せりき。まかれども春過ぎ秋暮れて、みめかたちありしにもあらず衰へにしかば、世に經る力失せはて、せむかたなくなりにしより、商人に契を結びてこの國の民となれりき。商人情なければ別を惜む事いとあさし。われをねもごろにせねば出で、いぬる後立ち歸るはと久し。歸る程おそければ、みづから待たずしもあらず。かゝるまゝには、唯むなしき船を守りつゝ、秋の月のすさまじきをのみ見る」といへり。白樂天、「我琵琶の聲を聞きて愁深し。又この語らひを聞くに、取り重ねたる心ちす。我も君も愁の心同じからずや。必ずその愁の盡きせぬことを思ひ知るべし。我いにし年の秋より、つかさのがれ都をはなれ替てこの所に沈めり。又病の筵に臥して立ち居る事たやすからず。いと物心細き折に、浪風より外に立ちまじる人もなきすみかには、蘆の上葉を渡る風、をちこち人の舟よばふ音のみ聞えて、いまだ樂の聲を聞かず。今宵の君が琵琶のゑらべを聞くに、はとほと天の樂を聞かむが如し」。これを聞く人皆涙を流せり。その中にも、白樂天一人袂うちぬと見えけり。

「いにしへにあへりしことを盡さずば袖になみだのかゝらまじやは」。この人は、世の中の人の心の皆濁れるを憂しと思ひけむ、一人すまして常は都に跡をなむ留めざりける。

むかし、賈氏といふ人、類ひなくかたちわろくて顔美くしきめをなむもちたりける。この女かばかり醜き人とも知らずあひそめにければ、悔しき事取り返すばかりに覺えけれど、いふかひなくて明し暮すに、よき事惡しき事すべて物も言はずえも笑はで、よのつねはむすばゝれて過ぐしけるを、男たぐひなく憂しと思ひて、この女にも言はせうちゑませて見ばやとえけれども、いかにもかひなくて三年にも鬢なりけり。春の野に出で、諸共に遊び侍りけり。きいすといふ鳥の澤のはとりに立ち居侍りけるを、この男弓矢を取りて名を得たりければ、このきいすをたちどころに射殺してけり。これを見るに、年比のにくさも忘れて物言ひうちゑみたりければ、男うれしさとぐひなくおぼえて、

「聞かましやいもが三とせのことの葉を野澤のきいすえさらましかば」これを聞くにこそ萬の事よくせまほしけれ。

むかし、梁鴻といふ人、孟光にあひ具して年比住みけり。この孟光世にたぐひなくみめわろくて、これを見る人心を惑はして騒ぐ程なりけれど、この男を又なきものに思ひて、かしづき敬ふ事思ふにも過ぎたりけり。朝な夕なにいひがいとてけこのうつは物に盛りつゝ、眉のかみに捧げてねもごろにすゝめければ、齊眉の禮とぞ今は言ひ傳へたる。

「さもあらばあれ玉の姿も何ならずふたごゝろなき妹がためには」。志だに淺からずば、玉のすがた花のかたちならずとも、誠に口惜しからじかし。されどもみにくからぬ顔には見かへにくゝこそ。されども以下、二十一文字イテ。

むかし、相如といふ人ありけり。世に類ひなき程に貧しくわりなかりけれど、萬の事を知り、才學ならびなうして琴をぞめでたく彈きける。卓王孫といふ人の許に行きて、月の明き夜終夜さんをゑらべて居たるに、この家あるじのむすめに卓文君といふ人哀にいみじく覺えて、常はこれのをみめで興じけるを、この卓文君が父は相如に近づく事を厭ひ惡みけれど、琴のねを^や哀と思ひしみにけむ、この男にあひにけり。女がたの父卓王孫は、よろづの實に飽き充ちて、世の侘しき事を知らざりけり。かゝれども、このわび人にあひ具したる事をいと心づきなさまに思ひとりて、いかにも娘のゆくへを知らざりけれど、露塵苦しと思はでなむ年月を過ぐしける。この男、蜀といふ國へ行さける道に、昇遷橋といふ橋ありけり。それを歩み渡るとて橋柱に物を書きつけゝり。我大車肥馬に乗らずば又この橋を還り渡らじと誓ひて、蜀の國にこもりにけり。その後思の如くめでたくなりて、この橋をなむ還り渡りける。女年比貧しくてあひ具したるかひありて、親しき疎き人めもあやになむ羨みける。

「まづみつゝ、我が書きつけし言の葉は雲々にのぼる橋にぞありける」。心長くて身をもてけたぬなむ、今も昔も猶いみじくこそ聞ゆれ。

昔、石季倫といふ人ありけり。萬の實に飽きて世の貧しき事を知らざりけり。金谷の園のうちに五百の舞姫を集めて悦び樂む事夜晝を別かず。このうちに緑珠と聞ゆる舞姫なむ、數多の中にも勝れたりければ、身に優りて淺からず思へりけり。かくて月日を送るに時のまつりごとを取れる人孫秀、この緑珠が類ひなき有様を聞く度に、ひとづてならざらむ事をねもど

ろに思へりければ、堪へかねて色に出でぬ。石季倫身をはかなきになすとも心よわからじと思へるを、この人まけじ心のいちはやさにつはものを集め勢きはめて志をやぶる。この時縁珠は遙に高き樓の上に居たりけり。石季倫かの人手に随ひて、ゆくゆく目を見合せて、「誰ゆゑにかかくはなりぬる」といひけるに、堪へ忍ぶべき心ちせざりければ、樓の上より身を投げて死なむとするを、「身に優るものやはある」と諫むる人数多ありけれど、遂に聞かず。

「後れ居て歎かむよりも時のまに死なむいのちはをしからなくにぞ」。いとかく思ひ取りけむ、心のありがたさも言ひ盡すべからず。

ひかし、宋玉と聞ゆる人、かたちすがた世に類ひなく、ざえ才學ならびなかりけり。この人の住みける東の隣に、又世に類ひなく美しくしき女ありけり。この宋玉をいかでもと思ふ心の忍び難さに、東のかきに夜晝立ち添ひて窺ひけれど、三とせまで目をだに見遣らざりければ、戀ひ侘びて、つひに逢ふこと知らぬ涙に沈みはてけり。

「戀ひわびて三とせになりぬ花がたみめならぶ人のまたもなければ」。ゆかしからずはなかりけめど、あまり心の優にて人に物を思はせむと思へりけるにや、又さもやなかりけむ、心のうち知りがたし。㊦

ひかし聊々といふ人、長尙書に契を結びて幾年経れども露ちり互に心に違ふ事なかりけり。花の春のあした月の秋の夜も、諸共に舞を見、歌を聞きて遊び戯ぶるゝより外のいとみなし。かゝれども、若き老いたる定めなき世のうらめしさは思の外にこの男はかなくなりけり。

り。その後この女立ち後れたる事を悲しと思ひて、別れの涙乾くことなし。みめかたち心ばせなどいといめづらかなる程に、世に聞えたりければ、帝より始めて色を好む人々ねもころに挑み言ひけるを、限なく憂しと思ひけり。秋の夜の月隈なく照らすを見て、まづ昔のかけのみ思ひ出でられて、

「もろともに見しに光やまさりけむ今はさびしき秋の夜の月」。命はかぎりありといひながら、かくても生ける身のつれなさなどを思ひみだれ拈ける。かくしつゝ月日を過ぎ行けば、鶯子樓の内荒れはて、ゆかのうへ傍寂しく覺えけるまゝには手づからみづから、裁ち着せたりける唐衣を取り重ねつゝ身にふるれど、ありしばかりのにはひだになかりければ、いとい涙をそふるつまとなりにけり。

「見るたび器にうらみぞふかき唐衣たちし月日をへだつとおもへば」。かくしつゝ十二年の春秋を送りて、終にはかなくなりけり。

むかし、張文成といふ人ありけり。姿ありさまなまめかしきよげにて色を好み情身にあまうければ、世にありとある女、さながら心強くは覺えざりけり。そのころ、時に逢ひ華めかせ給ふ后おはしましけり。數多のなかに萬勝れてなむ聞えさせ給ひければ、この男人やうならず物思ひに沈みて生けるかひなくぞおぼえける。かゝるまゝには、寝ても覺めてもこの事の忍び難さを又言ひ合する人だになかりけれど、芹を摘み、地盤に臥して年比になりぬれば、さるべきことにや、浅からぬ心のうちをそらに知らせ給ひにけり。哀にいみじく思されなが

ら心に任せぬ御身のふるまひなれば、慰む方更になくて明し暮すに、いかなるひまかありけむ、夢にゆめ見る御心ちして下紐解けさせ給ひにけり。血の涙袖に包むべき心ちもせざりけれど、唐國のならひにてかやうの事世に聞えぬれば、いみじき大臣公卿なれどもたち所に命をめさるゝ事なれば、又もあひ見給はず。后も哀に類ひなく思されながら、雲のかけはしとだえがちにて踏み傳ふばかりの道だになければ、この男たなばたの年に一夜の契をさへ羨みて、人知れぬ涙のみぞ絶ゆる時なかりける。かゝれども、あわたくしく色に出す事やなかりけむ、物や思ふと問ふ人だになくて年月を送るに、わりなくいみじく覺ゆるよしの文を作りて后に奉りける。

「戀ひわぶる底の水屑となりぬれば逢ふ瀬くやしきものにぞありける」この文は遊仙窟と申して我が國にも傳はれり。后これを見給ふ度に、御身亡びぬべく思されけり。唐の高宗の后に則天皇后の御事なり。

昔、徳言といふ人、陳氏ときこゆる女に相具して侍りけり。かたちいとをかしげにて心ばへなど思ふさまなりければ、互に淺からず思ひかはして年月を経るに、思の外に世の中亂れてありとある人、高きも卑しきもさながらやま林に隠れ惑ひぬ。去り難き親はらからも四方に立ち別れておのがささま逃げさまよへるなかに、この人別れを惜む心誰にも優れたりければ人知れずもろともにあひ契りけり。「我も人もいづかたとなく失せなむ後おのづから世の中静まりて又もあひ見る事ありなむものを、その程の有様をばいかでか互に知るべき」と

聞えさするに、女の年比もちたりける鏡を中より切りておのおのその片々を取りて、月の十五日ごと市に出してこの鏡の半を尋ねさするものならば、必ずあひ見て互にその有様を知るべしと言ひつゝ、いといたうち泣きて別れ去りぬ。その後この男戀しさわりなくおぼえていたづらに月日を過ぐすまゝには、いかなる人に心をうつして契りし事を忘れぬらむと、胸の苦しさ抑へ難くぞおぼえける。

「ますかゝみわれて契りしそのかみの影はいづちがうつりはてにし。かやうに思ひ遣りけるにしも、色かたちのなまめかしく華やかなるにやめで給ひけむ、時の親王にておはしける人に限なく思ひかしづかれて年月を経るに、ありしには似るべくもなき有様なれど、この鏡の片々を市に出しつゝ、昔の契をのみ心にかけてよのつねは下もえにてのみ過ぐしけるに、鏡のわれもたる人をし尋ねあひて男女の有様互に覺束なからず知りかはしつ。女これを聞さけるより覺えずなやましき心ちうち添ひてうつしこゝろならぬ氣色を見咎めて親王怪しみ問ひ給ふを、さすがにおぼえて暫しはいひまぎらはしけれど、まひてのたまはすれば、侘しながらありのまゝに聞えさせつ。親王これを聞き給ふに、御袖もまばりあへず哀にいみじく思されけるにや、よそはひ嚴めしきさまにて出立て、昔のをとこの許へ送り遣はしたるに、徳言かぎりなく嬉しきにつけてもまづ涙をささだちける。

「ちぎりおきし心にくまやなかりけむたゝびする中川の水。賤しからぬ有様を振り捨て、昔の契を忘れざりけむ人よりも親王の御なさけは猶たぐひなくこそおぼゆれ。

むかし、秦の穆公の娘に弄玉と申す人ありけり。秋の月のさやけく限なきに心をすましてまたく世の事にはだされず。また簫史といふ樂人あり。秋の月清くすまじき曙に簫をふく聲哀に悲しきと限なく、弄玉それにや心を移しけむ、進みてあひたまひにけり。世の人あさましき事に思ひそしりけれどいかにも苦しと覺えず。唯諸共にうてなの上にて簫を吹き月をのみ眺め給ふ事二心なし。鳳凰といふ鳥飛び來りてなむこれを聞きける。月やうやく西に傾ぶきて山の端近くなるほどに、心やいさぎよかりけむ、この鳥、簫史、弄玉二人の人を具してむなしきそらに飛びあがりぬ。

「たぐひなく月にこゝろをすましつゝ雲むにいりし人もありけり」。むなしき空に立ち昇るばかり心のすみけむもためし少なくこそ。又簫の聲にめで、人のあざけりを忘れ給ひけむも、好ける御心のほどおし量られていといみじ。

昔、男女あひ住みけり。年などもさかりにて萬行く末のことまで浅からず契りつゝありふるに、この男、思の外にはかなくなりけり。その後涙に沈みてあるにもあらず覺えけるを、我もわれもとねもごろに挑みいふ人ありけれどいかにも許さうけり。これを聞くにつけてもなき影をのみ心につけつゝ、時のまも忘るゝひまなくて終に命を失ひてけり。そのかばねは石になりて仕けり。

「ことわりや契りし事のかたければ遂には石となりけるかな」。此の石をばその里の人々望夫石とぞいひける。一筋に思ひ取りけむ心のありがたさもこの世の人には似ざりけり。

むかし堯舜と申す帝おはしましけり。御まつりとより始めて萬めでたき御代のためしにはまづこの御事をのみこそ申すめれ。娥皇女嬃と聞え給ふ二人の後さぶらひ給ひけり。御心ざしいづれまさり給へりとけぢめ見えす。唯紅紫などのやうに淺からぬ御事にてなむ侍りける。かくて多くの年月をなむ保たせ給ひけれど、この世は限ある所なれば、みかど湘浦といふ所にてはかなくならせ給ひぬ。その後二人の后紅の涙を流し給ひてふるきをおぼせりければ、まがきの呉竹も御涙にそまうてまだらになりけり。

「君こふる涙のいろのふかきには竹もなみだ涙にそむところ聞け」。昔の人の、思ひそめつる事は淺からぬにや。

むかし、陵園といふ宮の内に閉ぢ籠められたる人ありけり。玉のはだへ花のかたちあざやかにて世にならびなく美しくかりけり。年若かりける時女御にいつきかしづかれて、うちに参りけるに、親しさうとき楊貴妃李夫人のためしにも勝りなむと思へりけるを、數多の御方々めざましき事になむ思しける。その御いさどほりにや、さまたまのなき事によりて陵園といふ深き山宮に閉ぢ籠められて、明くるめもなき物思ひにやつれつゝ、みめかたちもありしにもあらずなりにけり。父母生きながら別れぬ事をなげき悲しめどもあひ見る事なかりけり。よの常は深き宮の内に心すこくて風の音蟲のねにつけても思ひ残す事なし。かくしつゝ、やうやう春にもなり行けば、よもの山邊に霞たなびき、野邊の早蕨あしたの雨に萌え出で心ちよげなるも我が身の爲には羨ましく覺えて、花のにはひ薫り渡るにも獨ねのこの上

心ときめきせられつゝ哀を添へたる臘月夜のみさし入れども、問ふに音なき影ばかりほのかにて明し暮すに、春過ぎ夏たけて暮れにし秋も廻り來にけり。様々咲き亂れたる白菊の夕の露に濡れたるを見るにも、むかしの重陽の宴といひしこと思ひ出でられて、落つる涙とい抑へがたかりけり。

「見るたびに涙つゆけきまら菊の花もむかしやこひしかるらむ」。この人山宮に閉ぢこめられて後、三代の帝にぞ逢ひ奉りける。

ひかし、漢の武帝、李夫人はかなくなりて後思ひ歎かせ給ふ事年月を経れども更にをこたひ給はず。そのかみ病せし時みゆきま給ひしかども、いかにも見え奉らざりけり。帝あやしとおぼしてこのよしを問はせ給ふに、「我君に慣れ仕うまつりし程、露ちり氣色に違ひ奉らざりき。又御志淺からねば恨をのぶることなし。まかれども病に沈みかたち變りて後、御心に背く罪あるべけれども又思ふ所なきにあらず。紫の草のゆかりまで恵み給ひあはれみを蒙ぶる事は唯君の御志の改らざる程なり。まかるを今のかたちに昔の御心變りなば、はかなきあとにも愁の涙色まさらむ事を思ふに、衰へたる姿いと見え奉らまうし」と聞えさす。帝これを聞かせ給ふに悲しくわりなくおぼさる。たとひ夜はのけふりと立ち昇るともいかでそのゆかりを懷かしと思はざらむ。唯この世にて今一度あひ見るべきことをまひてのたまはずれども、遂に聞かではかくなりなければ、帝御心にうらみふかく甘泉殿のうちに昔の姿をうつして朝夕に守り給ひければ、物言ひ笑む事なければ徒に御心のみ疲れにけり。

「繪に書ける姿ばかりの悲しきは問へどこたへぬなげきなりけり」。又なき人の魂を反す香をたきてよもすがら待たせ給ふに九重の錦の帳の内かすかにて、夜のともし火の影はのかなるにやうやくさよ更け行く程、嵐すさまじく夜靜なるに、反魂香のゑるしあるにやと思し給ひけれど、李夫人のかたちあるにもあらず、なきにもあらず、夢幻の如くまがひて束の間に消え失せぬ。待つと久しけれと還る事はぬばたまの髪すぢ切る程ばかりなり。燈火をそむけて帳を隔て、物言ひ答ふる事なければ、なかなか御心をくだくつまとぞなりにける。昔、おなじ帝、誰とは申しながら、限なくこの世を惜み、命ながらへむ事をねがひ給ひけり。まぼろしといふ仙人に仰せて蓬萊不死の藥とりに遣しつゝ、はかなき御遊び戯ぶれにもこの世にながらへておはせむ事をぞ營み給ひける。おほよそ人の好み願ふ事は必ず空しからねば、この御時に當りて東方朔といふ人、仙宮より罪を犯して暫らく人間に下されたりけるを、帝まぢかく召し使ひて萬覺束なく思されける事をば、まづこの人にぞ問はせ給ひける。かゝるほどに宮の内に色黄なる雀の例の鳥にも似ず、怪しささましたる飛び遊びけるを、帝「日頃かゝる鳥見えず。いかなる事にか」と問ひ給ふに、東方朔がいはい、「君長生不死の道を好み給ふにより御志にめで、西王母と申す仙女参りて遊び奉らむと告げ知らするよしの使なり」と聞えさするに、帝嬉しく思して、「いかなる有様にてその人を待つべきぞ」とのたまはするに、「宮の中まづかにて庭の面をさよめ香をたき、様々のゆかを設け給ふべし」と申しけり。かくてたのめしほどにもなりぬれば、帝御心すみて、ゆかのもとに東方朔を隠し置

きて、人知れず今や今やと待たせ給ふに、秋八月ばかりの月の光くまなき夜、かうばしき風うち吹きて晴の空のどかなるに紫の雲一村たなびけり。そのなかよりこの世ならず目もあやなる人百人ばかりおり降り。そのうちにあるじと覺しき人、帝にあひ奉りて様々の事どもを聞えさす。やゝ久しくなる程に、この人桃七つを取り出して、その三つをば帝に奉らせ給へり。これを御口にふれ給ひけるより、御身も軽く御心ちも涼しくならせ給ひて空にも飛び昇りぬべく、生死の罪障も解けぬべくや思しけむ、「この桃我が國に移し植ゑて種をも取りてしがな」とのたまひけるに、西王母うち笑ひて、天上のこのみの、人間にとゞまり難くやとなむ言ふにも堪へずけに思せり。又「不死の藥や侍る」と尋ねさせ給ふにも、「生老病死の下界に生れ給ひながらいかでか不死の藥を求めさせ給ふべき。はかなき御心なり」と聞えさす。西王母のみにあらずかひなきおろかなる心にも、賢き聖の帝の御心とは覺えず。かくてまばしばかりあるに上元夫人に雲環の誘うたせて舉妃瓊と聞ゆる仙人舞ひけり。玉の簪を動かし錦の袖を翻す有様めぐる雪にことならず。帝これを見給ふに、「おもほえず御袖濡れにけり。すべてこの世の樂の聲は物の數ならず覺え給ひけるより、御心もいたくあくがれぬ。夜やうやう明がたになる程に、「その御ゆかの下にかくれ居て侍りける東方朔は仙宮の人なり。然れどもその三千とせに一度なる桃を三度まで盗める罪によりて、まばらく人間に下されたとがをあがひて後は、又天上に還りきたるべきなり」とのたまひて、紫の雲立ち返りゆきしより、御心はそらにあくがれにけり。

「紫の雲のゆかりをいかなればたちおくるべき心ちせざらむ」。この後はいとい御心も空にあくがれて、いよいよ仙を願ひ給ひけり。唐國のならひにてかしたき帝には、仙人なども皆使はれ奉るにこそ。はかなくならせ給ひて後も御身はといまらせ給はざりけるとかや。ひかし漢の高祖と申す帝おはしけり。呂后と聞え給ふ后、東宮の母にて誰よりも御志重く見えさせ給ひけり。はか腹の親王趙の隱王と申す人を御志のあまりにや、帝も東宮に立てむと思しける御氣色を呂后見給ひて、あさましう心憂き事に思して、陳平張良と聞ゆる二人の臣下を召し寄せて、「かゝるいみじき事なむある。いかにしてかこの怨をやすむべき」との給ひ合するを、げにとや思ひけり。叶はざらむまでも計らひ侍るべし」と答へて還りぬ。又この後二人の人も、世の中の亂れなむする事をも思ひ歎きて、おのおの謀事をめぐらしてけり。商山といふ山に世を通れつゝ、帝の召すにも參らで籠り居たる賢人四人あり。それをこしらへ出してこの惠太子に附け奉りたらば、さりとて耻づる心おはしなむものをと思ひよりて、この山の中に尋ね行きにけり。四人の人、うち見つゝ驚きていはく「何事により、いとかく怪しげなるすみかには渡り給へるにか」と聞えさするに、「世の中亂れむと仕うまつれば、我等が身までもなげき深くてこの山に隠れ居むと思ふ心侍り。まかれども世の中の亡び治らざらむ事は唯その御心なり」といへるに、この人うち笑ひて、「君も我に耻ぢ給はむ事いとありがたかるべけれど、空しうかへし奉らむもむげに情なきやうなれば、後の事を願みず今日ばかりは御送に參るべし」といへりければ、限なく嬉しく覺えて四人の人を具しつゝ、東宮の御

許へ参りぬ。忽に學士といふつかさになりてふるまひ給ふべき有様など、こまやかに教へ奉るに、たのもしく思さるゝ事限なし。かくて年立ちかへる春のあした、東宮うち参り給へる御供に、この人ども四人いとやうやうおそろしくしくふるまひ、氣高きさまにて御供に侍りけるを、帝より始めて仕うまつる人ども、各怪しげに思へり。帝「これは誰にか」と尋ね問はせ給ふに、御もとに侍ひける人申していはく、「日比めしつる商山の四皓に侍り」と申しけるに、御心も慰せられてあさましくぞ思されける。これによりて帝、四皓に問ひてのたまはく、「我昔より汝に國の政を任せむと思へりしかどもあへて行はざりき。然るをいま年わかくいとけなき東宮に隨へる心知りがたし」。四皓申していはく「君は御心賢くて、世の中を平げ國を治め給へども、人をあなづり賢きをも輕め給ふ過ちおはします。東宮は若くおはすれども、御心おきて情ふかく禮義を正しくま給ふと聞え侍るによりて、参り仕うまつれり」と聞えさせければ、東宮は我よりも心賢きにやと思して、この事を思ひ留まらせ給ひにけり。かゝれば、呂后陳平張良より始めて、世にある人々さながら心安くなりにけり。この趙隱王の母に戚夫人と聞ゆる人は、帝ちやうを怨みそねみ奉り給ひけるを、呂后いやまして心憂き事にぞ思しける。かゝる程に帝はかなくなりたまひにければ、東宮位に即きて萬御心に任せたりけれども、呂后年比の御いきどほりにや、いつしか戚夫人を捕へて髪をそりかたちをやつして、あさましく心憂きさまになし給ひつるを、帝「かゝらで侍りなむ。この事定めて先帝の御心に背くらむ」などさまたまに諫め奉り給へども、いかにもかなはざりければ、心苦しく思しつ

過ぐし給ふに、この趙隱王さへ失はむとまたまひければ、帝夜も晝も御傍に放たず起き臥し給ひけり。后ひまなき事を安からずおぼして、毒入れたる酒をこの人に進め給ひけり。帝心得て、「まづ我に」とのたまひければ、あわてゝ取りかへしつ。かやうに人知れずぬもごろに玄給ひけれといかなるひまかありけむ、類ひなく力強き女房二三人ばかりを遣して、帝の御傍に臥し給へる人を情なくつかみ殺してけり。上あさましくは思しながら、いふかひなくて止みにけり。さてこの戚夫人月限なかりける夜、心憂く悲しきにつけても昔の有様や思ひ出でられけむ、そのよしの詩を何となく口ずさび給ひける。耳口ありけるもの、これを聞き答めて、「かゝる事なむ侍る」と呂后に申したりけるに、今ひとしほのにくさまさうて、足手を斬りつゝ、そのむくろには漆を塗りて世に汚はしく穢き溝に浸して置かれたる有様の、その物とも見えす哀に悲しげなり。その後こはきもの、けになりて程なく呂后を取り殺し奉りけり。これよりさきに商山の四皓は帝の御有様を心易く見なし奉りて後、暇を申してもとのすみかに還りぬるを、世の人たとへをとりて譽めていはく「世の中早にあひて草木も枯れ土さへ裂けて人の命も絶えぬべきに、一度雨降りつゝ、四方の梢をうるはし門田の稻葉も露繁く結び居ぬる後、八重の雨雲山に歸り入るなるべし」となむ言ひけるこそ誠にさもと覺ゆれ。又周文王と申しける帝の御時、太公望と聞ゆる賢人帝に召し出されて後、つかさ位身に餘れるに喜びて歸る思ひなかりけり。堯と申す帝許由に位を譲らむとて三度まで召しけるを「穢き事を聞きつ」といひて潁水といふ川に耳を洗ひけるも、いかなる事にかとをかし

きやうに聞ゆ。又巢父といふ人牛を追ひてこの川を渡らむとするに、「穢き事聞きて耳洗ひたる流にしもけがるべきかは」とて、遙によけて通りけむをこがましくこそ覺ゆれ。又水汲むひさを一つ竹の編戸にうち懸けたりけむが、風の吹く度に戸に當りつゝ鳴りけるをさへ、「うるさし」といひて忽に割り捨てけり。これ等を聞くにもげにとも覺えぬに、この商山の四皓は情あり、人を助くる心も深くて、誰よりも世のつねびたるやうにこそ覺ゆれ。

「いさぎよく耳をあらひし川水をけがらはしとは誰かいひけむ」。

昔唐の玄宗と申しける帝の御時、世の中めでたく治まりて吹く風も枝をならさず。降る雨も時を違へざりければ、皆人天の下おだしきに誇りて、花を惜み月を弄ぶより外のいとなみなし。帝も色にめで香にのみ耽り給へる御心のひまなきにや、萬をば楊國忠と聞ゆる人に任せ、やうやくみづからの政怠らせ給ひにけり。これよりさきに、元獻皇后武淑妃など聞え給ひし後、世にならびなく御志深くおはしましき。それはかなくならせ給ひて後は、數多の中に御心に叶ひたる人おはせざりき。これにより高力士に仰せられて、都のはかまで尋ねもとめさせ給ふに、楊家の娘を得たまひてけり。そのかたち秋の月の山の端より高く昇る心ちして、そのいさぎしは夏の池に紅のはちす始めて開けたるにやと見ゆ。一度笑めば百の媚なりて人の心惑ひぬべし。すべてこの世の人にはあらず。唯天人などの暫し天降れるとぞ見えける。かゝりければ、^⑤へ内裏のうちに忽にいでゆを掘らせてこの人にあむさせ給ふ。湯より出でたる姿誠に心苦しうすものゝころも猶重げになむ見えける。色ざし歩み出で給へるけ

しきかるびたるものから、氣高く愛々しくて、さすがまた思ふ所あるやうにふるまひたまへり。上これを見給ふ度に、嬉しく喜ばしく思さるゝ事たぐひなし。唯みめかたちの人に勝れまわさる様の世にならびなきのみにあらず。萬につきて暗からず、事に觸れて情深くなむ物し給ひける。又上の御心の中に思せることをば、さながらそらに知りてふるまひ給ひければ、限なき御志をも世の人ことわりと思へり。同じ車一つゆかにあらねば、みゆきしいね給ふことなし。三千人の女御后、我も我もと侍ひ給へど、御目のつてにだにかけ給はず。唯この人のみぞ、月日に添へて頼ひなきものにおぼしける。又驪山宮にみゆきし給ひては、霓裳羽衣の舞を奏せさせ給ふ。舞の袖風に翻る度に玉のかざり庭に落ち積りて極樂世界の瑠璃の池もかくやあらむと覺えたり。大凡驪山宮の秋の夕に心をとめぬ人なし。春ははるのあそびに随ひ、夜はよの短きことを歎き給ひける。かくてよもすがらひめもすに時をわかず、これより外の御いとみななかりければ、國の政のすみ濁れるをもさとり給はざりけり。すべてこの楊貴妃のはぐゝみによりて、世の苦しき事を忘れつゝ、誇り驕れる人その數をえらす。又天下の人高きも卑しきも、心に違はじと思へるけしきなべてならず。ある人聞く人羨みめづるさま言ひ盡すべからず。これによりて女子を産めるものは悦びかしづきて、かゝるたぐひを心にかけるもをこがましくこそ。又帝の御弟に寧王と申す人、御傍をはなれず、ま近くゆかを並べて夜晝をわかぬ御遊にも必ず侍ひ給ひけり。この親王玉の笛を帳の内に隠し置かせ給へりけるを、楊貴妃取りて何となく吹きならし給ふ。帝これを御覽じつけて、「玉の笛は

あるじにあらすじて吹く事なし。然るを志の重きに誇りて禮を過てり。事のみだれにはあらずや」と、殊の外に御氣色變りにけり。これによりて楊貴妃、痛み思す心や深かりけむ、鬢の髪一房を切りて帝に奉り給ひ「我が身の膚へ頭の髪ならでは皆これ君の賜にあらざるや。然るを我今御心に背きぬれば罪に伏してをこたりを申すべし」となくなく聞えさせ給ふに、御使もいとほしたなきまで覺えつゝこのよしを奏するに、御心もあわて、物も覺えさせ給はずながら、時のまに召し返して世に猶類ひなくもある心ばせかなと思し續くるに、御志の深さ日比には過ぎにけり。初秋の七日の夕、驪山宮にみゆきし給ひて、たなばたひこぼしの絶えぬ契を羨みてはかなきこの世の別れ易きことをぞ、かねて歎き給ひける。かたちは六つの道にかはるとも、わひ見むことは絶ゆる時あらじと契らせ給ひて、

「すがたこそはかなき世々にかはるとも契は朽ちぬものところ聞け」などのたまひつゝ、御手を取りかはして涙を流し給ひけるを、末の世に聞く人さへ袖の上つゆけし。かくて年月を送らせ給ふに、右大臣楊國忠、楊貴妃のせうとにて世の政を取れりけれど、人の心にそむく事多く積りにければ、世の中いさどほり深くなりぬ。そのなかに楊貴妃の養子に左大臣安祿山と聞ゆる人、いさはひを争ひて、心の中いさどほり深けれども、これをあやむる人更になし。これによりて忽につはもの十五萬人集めて遂に楊國忠を亡すに、世の中亂れて騒ぎ罵りあへり。百敷の内までもそのおそれ深ければ、帝はかに逃げさせ給ふ。東宮楊貴妃御傍にさぶらひ給ふ。楊國忠、高力士、陳玄禮、韋見素又御供に侍り。かくて蜀といふ國へ退かせ給

ふに、いかならむ野の末山の中なりとも、この人とだに二人あらば生けらむ限り思ふ事あらじと感さるゝに、人の氣色思はずに變りてはしたなく見えければ、帝あやしみて問はせたまふ。陳玄といふ人、東宮に申していはく、「早く楊國忠政を亂り人の心を破るゆゑに、君も今日この事にあはせ給ひぬれば君の御敵世の仇にあらすや。まかじ、唯楊國忠をうしなひて人の愁をやすめむには」と聞えさす。東宮これを聽し給ふにより、楊國忠目の前にはかなくなりぬ。帝あさましくはかなく思されながら、この後ゆかむと玄給ふに、つはものども立ちまはりつ、「亂れの根や猶あり」と申して袂からぬ氣色ありけり。この時に上、楊貴妃の免かるまじき事をまらせ給ひにければ、御顔に袖を掩ひてともかくも聞えさする事なし。かゝる程に、この世に楊貴妃、いかならむ巖のなかなりとも覺束なからぬ御すまひならばいと心苦しからず思しけるに、思の外に命も絶えぬべきにやと、淺からぬ別れの涙、千玄波の紅よりも猶色深くてせむかたなく見え給ひながら、猶々帝に目をかけ奉り給ひて、かくれさせ給ふまで顧み給へる御有様何に譬ふべしとも見えす。撫子の露にぬれたるよりもらうたく、青柳の風にまたがへるよりもなよろかに、太液の芙蓉未央の柳に通ひ給へるをしも、情なく道のはとりの寺の中にして、ねりぎぬを御頸に引きまといつゝ遂にはかなくなし奉りつ。物の哀を知らぬ草木までも色かはり、情なき鳥けだものさへ涙を流せり。

「ものごとにはからはぬ色ぞなかりける緑の空も四方のこすゑも」。御供に侍ふ人、心あるも心なきも、猛さも猛からぬも、皆涙におぼれて行きがたも知らず。又帝の御心のうちには、

「何せむに玉のうてなを磨きけむ野邊こそつひのやどりなりけれ」。唯御袖の下より紅の涙ぞ流れける。御心迷ひにや、馬の上も危く見えさせたまへば、人々うらうへに添ひ奉りて、やうやう行かせ給ふに、つはものども糧盡き力疲れて、帝に隨ひ奉らむ事二心なきにあらねば、陳玄禮も留むべき心ちせず。かゝるほどに益州といふ國よりみつぎ物數えらす運べりけるを、御前に積み置かせて、さぶらふ人々に別ち賜はせてのたまはく、「我政のすみ濁れるを知らざりしより、今日このみだれにあへり。我が身一つによりて去り難き親はらからにも別れ、二つなき命をも捨て、猶我に隨へり。我又いは木ならねばあはれむ心ふかし。早くこの物を賜う^{らう}て、おのおの故郷へ歸りね」とのたまはする御袖の上秋の草葉よりもつゆけく見ゆ。この御事を承るもの皆涙をおさへて申していはく「命の終らむまでは、唯君に隨ひ奉るべし」。かくて日も夕暮になるほどに、傍寂しきにつけても、いかなる中有の旅の空に、ひとりや暗にまよふらむあど、おぼし亂れたる心苦しき、哀に悲しなどいふもおろかなり。夜もやうやう明方になりぬれば、出で行かせ給ふに、有明の月西にかたぶく程、雲の遙に鳴き渡るかりがねを聞かせ給ふにも、御心のうちかきくらされていづ方へ行くともおぼされず。蜀山といふ山さかしく^あ得て、とだえがちなる雲のかけはし歩み渡らせ給ふ御氣色、よそめにだに猶忍びがたし。ものゝつかさ人かす衰へ、いきはひいかめしかりし旗などさへ、雨に濡れ露にまをれてその物とも見えず。御供に侍ふ人々、何事につけても物心細くおぼえて、鳥の聲もせぬ深山に、假の宮いとあやしきさまなり。月の影より外に光なき心ちのみして、あ

るにもあらずあさましき程なれど、所につけたる御すまひは様かはりて、かゝらぬ折ならばをかしくもありぬべし。これにつけても、九重の錦の帳の内の玉の床の上に、枕をならべ衣をへだてざりしむかしは、我何事を思ひけむなど思されけるも、誠にことわりなり。かゝるほどに、東宮は譲をうけて位につかせ給ひぬ。あしき心あるものを失ひぬ。世の中をまづめて、太上天皇を迎へ取り奉らせ給ふ。まぢかく内裏をならべて、萬を申し合せつゝ、御政あるべしと聞えさせ給へどこの御物思ひのあまりにさるべき事とも思されず。世もたひらる御心もまづまりて後は、御歎もわくかたなく一筋になりぬ。時遷り事をはり、たのしひ盡きかなしみ來たる。池のはちす夏ひらけ、庭の木の葉秋落つることに、御心の慰めがたさ、頼ひなく思されける時は、はかなく別れにし野邊に御幸せさせ給ひけれど、淺茅が原に風うち吹き、夕の露玉と散るを御覽じても、消え入りぬべくぞおぼしける。

「もろともに重ねし袖も朽ちはて、いづれの野邊の露結ぶらむ」。かやうにおもひつゝ、時移りて涙をおさへて立ち還らせ給ふ御有様のよわよわしさも、いはゞおろかなるべし。

「別れにし道のはとりにたづね來てかへさは駒にまかせてぞ行く」。春の風に花の開くる朝、秋の雨に木の葉散る夕、宮のうち哀に寂しくて、いろいろの草の花、庭の面に咲き亂れたる。又色々紅葉の錦、階の上に紅深く見ゆ。昔の楊貴妃のま近く使ひ給ひし女房など、月くまなき夜は、昔を戀ふる涙にむせびつゝ、ことばを調べ琵琶を弾き玉子にけるにも、いとい御袖の上ひまなく見ゆる心苦しさ、よその袂までもせきかぬる心ちす。忘れてもまどろませ給ふ

時なければ、夢の中にもあひ見給ふ事はありがたし。夜の蟋蟀枕にすだく聲にも御涙
まさり、夕の螢の汀に渡る蟬思ひにも消え入りぬべく思されけり。壁に背けるのこの燈火
光かすかにて、朝夕もろともに起き臥し給ひしとこの上も塵積りつゝ、ふるき枕ふるき衾空
しくて御傍にあれども、誰と共にか御身にも觸れさせ給ふべき。かくて二年ばかりにもなり
ぬれば、まぼろしといふ仙人参りて、「我が君の御心に、楊貴妃を思せる事の限なきことを知
れるゆゑに、六つの道覺束なき所なし。願はくは生れたまひつらむ所をたづね見て歸り参ら
む」と聞えさするに、嬉しく思さるゝ事限なくて、御物思ひ忽にをこたりぬ。この時まぼろし
空に昇り地に入りて、到らぬ所なく求むるに、そのあるしなし。雲に乗りつゝ猶東ざまに飛
び行くに、わたつみのなかにいと高き山あり。その上に玉の臺こがねの殿ども軒を列べ甍を
連ねたるよそはひ有様、凡てこの世の類ひにあらす。又そのうちに仙女數多遊び戯ぶる。此
の所に行き向ひて、玉の戸ざしを打ち叩くに、いひ知らず、この世ならぬ人出で、まぼろし
に逢へり。「楊貴妃の生れ給へる蓬萊宮これなり」といふを聞くに、嬉しさ限なくて、「唐の玄
宗の御使なり」と聞えさす。「楊貴妃唯今いね給へり。あしたを待つべし」といひて歸り入り
ぬる後、心もとなくて一人立てり。夕の嵐音なくて波の上遙に入日さすほど、折からにや哀
に心ばそし。かくて夜もやうやう半過ぐる程に、花のとばそに白露ひまなくおけるを見て、
「明けやらぬ花のとばその露けさにあやなく袖のそばちぬるかな」。かゝる程に、夜も
明け日も出でぬれば、楊貴妃出で給へり。こがねの簪ひかりあざやかに、玉のかざり目も赫

く程なりまほろしにあひ向ひて、暫しは詞に出し給はず。まづ落つる涙をぞ所せげにおぼさる。方士も袖の雫ひまなくて、やゝ久しくなる程に、楊貴妃のたまはく、「天寶十四年よりこのかた今日に至るまで、帝の御心の中を思ひやるに、なやましく苦しき事限なし。かばかりたへなる所に生れたれど、契の深きによりて猶我がうき名を留めし故郷のみ心にかゝれる。朝夕なれし里を見おるせど、徒に雲霧のみ隔てゝ見る晴間なし」など、さまざまにのたまはする有様、猶霓裳羽衣の舞にぞ似給へる。方士、帝の御心を知れりければ、ありのまゝに聞えさせつ。互に心のいふせさをはるけて、方士かへりなむとするに、楊貴妃こがねの簪を折りつゝ、「我が物とて帝に奉れ」との給はず。方士これを取りて事淺くや思ひけむ、「こがねの簪は世の中に類ひなきものにもあらず。そのかみ定めて人知れぬ御契ありけむものを、願はくは承りて奏せしめむ」といふに、楊貴妃氣色かはり、涙まさりて思し亂るゝことありと見ゆ。「昔天寶十年の秋七月七日、驪山の宮に侍りし時、たなばたひこぼしのあひ見る夕、長生殿の内音なくて、夜はのけしき物哀なりしに、帝我に立ち添ひてのたまひき。天にあらば羽をかはす鳥となり、地にあらば枝をかはす木とならむと。これ君より外に又知る人なし。この契り限なきによりて、必ず下界に生れて、定めて二度あひ見て、むつまじき事ふるさどが如くならむ。我この事をかねて知れり。思へばまかも悲しく、思へば又嬉しからずや」など聞えさせ給ふ御有様にも忍び難き御心の中顯れて、馬嵬の道のはとりに、今は限と見え給ひし夕の怨も、猶唯今のやうにおぼさるあは氣色、誠に梨花一枝春の雨をおびたり。

「光さす玉のかほばせえはたれてなほそのかみの心ちこそすれ」。方士かへり参りて、このよしを奏せしむるに、御心目を経て惱みまさりつゝ、生れ給はむほどをも、猶心もとなくや思しけむ、その年の夏四月に、みづから~~給は~~はかなくならせ給ひにけり。

「知らざりし玉のありかを聞き得てぞ夜はのけふりと君もなりにし」。これ一人君のみにあらず。人と生れて石木ならねば、皆おのづから情あり。古より今に至るまで、高きも卑しきもかしこきもはかなきも、この道に入らぬ人はなし。入りとし入りぬれば迷はずといふ事なし。まかじ唯心を動す色にあはざらむには。大凡樂み榮えもうきもつらきも、この世は皆夢幻の如し。八つの苦み遁るゝ事なければ、厭ひても厭ふべし。天上の樂み限なければ、五つの衰へさとも事なければ、願ふべきにも足らず、生れてもよしなし。まかじ唯心を一つにして三界を厭ひて九品を願ふべし。極樂を願ふともこの世に執をといめば、纜を解かずして船を出さむが難し。この世を厭ふとも極樂を願はずば、ながえをそむけて車を走らしめむが如し。この世をも厭ひ極樂をも願はば、苦みを集めたる海を渡りて樂みを極めたる國に到らむ事は疑ふべからず。ゆめゆめ出で難き惡道橋に歸らずして、行き易き淨土にいたるべし。ひかし、朱買臣、會稽といふ所に住みけり。世に貧しくわりなくてせむかたなかりけれど、文讀み物學ぶ事夜晝怠らず。そのひまにはたさいをこりて、世を渡るはかりごとをまけり。かくて年月を經るに、あひ具したりける女、限なく貧しきすまひを堪へ難くや思ひけむ、「我も人もあらぬさまになりて世を試みむ」など、こまやかにうち語らひければ、「かくてしもやあ

りはつべき。猶今年ばかりは心強くあひ念せよ」と、萬にこしらへけれども、終に聞かでその年の内に離れにけり。男戀ひ悲めども、いふかひなくて次の年にもなりぬるに、この人のさへ才學世に勝れたる事を、帝聞かせ給ひて、その國の守になされぬ。始めて國に下りけるありさま心詞も及はずめでたかりけり。かゝれども猶ありし妻のことを心にかけて、一國の内を尋ね求めさすれども、似たる人なくて明し暮すに、野に出で、狩し遊びける時、事もなめならず怪しく侘しげなる賤の女がカタミといふものを臂にかけて菜を摘みてゐざりありくを、ゆゝしげのものゝ有様やと見る程に、我が昔のともと見なしでけり。猶僻見にやと目を留めて見るに、いかにも違ふ所なかりければ、人知れず悲しく覺えて、くるゝや遅さと呼びとりてけり。女、我過つ事もなきに、いかなる事にか當りなむずらむと恐れ惑ひけれど、ありし昔の事などをこまやかに語らひければ、女あましく覺えて、このをところをうち見るよりいかい思ひけむ、いたく惱み煩ひて曉がたに絶え入りにけり。

「もろともに錦を着てやかへらましうきにたへたる心なりせば。心短きは、何事につけても口惜しき事にこそ。錦をきて故郷に歸るとは、この人のことなり。」

昔、晋の景公といふ人おはしけり。そのつかはれ人趙朔、國の政を取れり。また屠岸賈といふ人、争ふ心やありけむ、やゝもすればこの趙朔を退けむと思ふ心深くて、とがをもとめ、なき事を言ひつけて、罪に行はるべきよしを、あるじに言ひけれども、用ゐられざりければ、心中にいさどほり深くて明し暮すに猶やすめ難くや覺えけむ。趙朔をはじめとして、兄弟さなが

ら滅し失ひてけり。そのなかに年比相具したりける妻なむ一人この事にまぬかれにける。折しも唯ならぬ事さへありて、隠れ惑ふにつけてもわりなく悲しかりけるを、杵臼程嬰といふ二人の使はれ人、あるじを思ふ心深かりければ人知れず隠し育みて、若し生れたらむ子をのこ子ならば、親の敵をも思ひ知りなむ、唯いかにもして事なく人とならむ事を思ひ計らひけるを、敵もれ聞きて、めざましくなむ覺えければ、猶尋ね求めてもその跡を滅し失はむと思へりけり。これによりて、この女隠れ惑ひながら、本意の如くをのこ子を生みてけり。杵臼程嬰限なく嬉しく思ひけるにも、わりなくして、手づから自ら隠し忍びつゝ養へりける程に、この敵の屠岸賈、この事を聞きつけてあながちにあさり求めけり。母の心にせむかたなく覺えながら、きたりける袴のなかにこの子を入れて教へていはく「親の跡を繼ぎて君にも仕へ奉るべきものならば、物の心を知らずいとけなしといふとも、聲を立てゝ泣くことなかれ」、若し又この時に當りて、子孫長く絶ゆべきものならば、早く泣くべしと心の中に思ひつゝ、深く隠れ居たるに、本意の如くおとなかりければ、敵求めかねて歸りぬ。母の心によりこび深し。然れどもこのうれへにおきては、絶ゆる時あるべからずと歎き侘びつゝ、程嬰に杵臼語らうていはく、「この子を事なく養ひ立て、父のあとを繼がせむと命を捨てむ、いづれか難かるべき。程嬰答へて曰く「死なむは易し。たひらかに養ひ立てむ事はいと難し」といふに、杵臼がいはいく「恩の深き事は君我に勝れりき。易きにつけても我まづ死なば、その後難き事を遂げて、必ず仇を報い給へ」と言ひつゝ、をさなき兒を一人抱きて深き山の中に隠れ居

たり。程嬰敵に告げて偽りていはく「我求め給へる子のあり所を知れり。願はくはこがね千兩を賜ひて、教へ奉らむ」といへるを敵喜び騒ぎて、忽にこがね千兩を與へつ。をこがねしくは覺えながらあるべしてこの所に行き向へるに、杵臼子をうち抱きて、あされたる氣色にて居たり。敵これを見て、いつしか殺さむとするに、杵臼叫びていはく「愚かなるかな程嬰昔の恩を忘れて諸共に人となさずといひ知とも、いかでか千々のこがねに耽りて一人の子をば殺すべき。今は我を失はむことは、そのいはれなきにあらず。いとけなき子におきては何の罪かはあるべき。願はくは生けよ」とさけびけれど、忽に二人ながら殺しつ。その後まことの子をば程嬰とりて山の中に隠せり。年月経れども、敵疑ふ心なければ、又そのわづらひなくて十五年になりぬ。その後主人病に煩ひ給ひていと大事におはしけり。この事を占はしめ給ふに、罪なくして罪を蒙ぶる人の祟とトひ申しけり。趙朔を滅すことは、またく我が心より起らず唯屠岸買みづからのいきどほりによりて、世をなきにまなしてふるまへる故に、我今この病を受けたり。天の下にあるじとしてあるまじき事をする者を退けぬは、もはら我が咎なり。然ればいかなる事をまてか、この病をやむべき」とのたまふに、韓厥といふ人、萬に暗き事なかりければ、計ひ申していはく「趙朔が後をつがせ給ふべし。十五になる子一人たひらかにて侍り。事の有様をばこまかに知らせ給はずや」と申しけり。あさましと思ひて、忽に召し取りて見給ふに、昔はかなくなりし親に露ばかりも遠はず似たりけるを、哀にみじくおぼして、いつしか父の跡を繼がせ、つかさくらぬ身にあまる程にありてのち、本意の如く

親のかたきを滅し失ひつ。さるべきにやありけむ、何事につけても世に用ゐられ人に恥ぢられで二十にもなりぬれば、程嬰心安くおぼえけり。かくて後、このあるじにいとまをこひていはく「我は早く死に侍りなむ」といふ時に、あるじ物覚えす心あわて、「こはいかに」といふに、程嬰がいはく「我昔杵臼に誓ひき。安きにつけてまづ死なば、我は恩の深きによりて、難き事を遂げて後必ず報ゆべしと申しき。然るを我今死なずば、杵臼に空だのめするにあらずや。賢き人は言ひつる事を違へず」とばかりいひて、遂に我が身を刺し殺しつ。この時にあるじあやなくおぼえて、かゝる事を見ながら、世にあらむ事は恥なりと覺えけれど、空しく父の跡をたえむ事は本意ならず覺えければ、命を棄てずして藤の衣をぞ三年まで脱がざりける。歎き悲しむ事年月を経れども、更にをこたらざりけり。

「思ひ知る心はたれも深けれどかゝるためしはまたもあらじな。このつかはれ人二人が後の事より外のいとなみなかりけるも誠にことわりなり。あるじの名をば趙武とぞいひける。

ひかし平元^源君^親と聞ゆる人、三千人のつかはれ人を集めてこれを憐みねもごろに思ひけるに、このあるじのおもひづま、高き樓の上に居て四方を見渡しけるに、跛へたる者の、はふはふぬざりつゝ、水をくみに行きけり。左右の膝よりも頭猶引き入りて人の姿にも似ず、世にをかしげなりければ、この女思ひわくかたもなくてうち笑ひてけり。このかたは人笑ふ聲を聞きて「我かゝる病に煩ひて年月久しくなりぬ。今始めて人の笑ひあざけるべきにあらず。こ

れ偏に君の色を好みてつかはれ人を輕しめ給ふ故なり。若し我を棄てぬ御心ならば、笑ひつる人を失ひ給ふべし」と云ひてあるじに憂ふるに、おのれがいきどほりをやむべしとはいひながらさすがにあるべくもなき事なれば、その後月日を経るに、三千人のついはれ人、やうやう數すくなくなりゆくを、「我聊も過つことなし。然れども怨を抱きて通れざる心知り難し」とおのおのに言ひくだしけり。このなかに事につまびらかなるもの申していはいはく「君このかたは人をすかし給へり。これ我らが身の上にあらずや。若しかくの如きなくば、何をたのもしと思ひてか、身を捨て心を勵して君に仕へ奉るべき」といへり。あるじこれを聞きて、淺からぬ年比のむつまじさをも願みず、この女を忽に殺してけり。かたは人これを見て心ゆきぬ。又その外のつかはれ人ども、もとの如くかへりにけり。

「思ひきやたゞうちゑみし言の葉の死出の山路に散らむものとは」。跋へたるつかはれ人一人に、顔美くしき人を代へけるもいと情なきまわざなりや。大かたこれのみならず、唐國のならひにて怪しきものなれども、言ひ立ちぬる事を、帝もその志をば破らせ給はぬにや。昔、楚莊王と申す人、群臣を集めてよもすがら遊び給ひけり。その御傍に、淺からず思ひ聞えさせ給ひつる后侍ひ給ふを、人まれずいかでかと思ひ奉れる臣下ありけり。燈火の風に消えたりけるひまに後の御袖を取りて引きたりけるを、限なく憤り深くや思ひけむ、御手をさしやりてこの男のかうぶりの纓を取りて、「かゝる事なむ侍り。早く火をともして纓なからひ人をそれと知らせ給へ」と申し給ふを、みかど素より人を憐み情深くおはしければ、「燈火消

えたる程に、これに侍る人々各えいを取りて奉るべし。その後火はともすべし」とのたまはするに、この男涙もこぼれて嬉しくおぼえけり。かくて燈火あきらかなれど、誰も皆纓なかりければその人と見えざりけり。かゝれどもこの人、いかなるわざしてか君の情を報い奉らひと心の中に思へりけるに、あると敵の國にせめられて危ふき程におはしけるを、この人一人身を棄て、戦ひければあると勝たせ給ひにけり。このことを思はずにあやしくおぼして、その故を尋ね問はせ給ふに、この人申していはく「我昔后に纓を取られ奉りて思ひ遣るかたなく侍りしに、誰となく紛はし給ひし事、我今に忘れ侍らず」となくなく申しけり。

「なまけなき言の葉ならば今までに露のいのちのかゝらましやは」。あるとこれ聞かせ給ふにも、猶人として情あるべき事にこそと思しけり。

昔、後漢の世に荀爽といふ人ありけり。心賢く顔美くしき娘をぞもちたりける。みめ心の類ひなきのみにあらず。さえず才學ならびなくてせぬわざなかりけり。これを父母もいつきかしく事限なし。かゝりければ、たかき卑しきさながら心をかけてぬもむろに挑みいはせける中に、隠瑜と聞ゆる人、心に足れる事やありけむ、この娘にあはせてけり。男心ざし深くて又なきものに思ひけるも、誠にことわり深く見えけり。三年ばかりになりければ、月日の過ぐるまゝにはいと類ひなくのみ覺えて、様々に浅からず契り置きける事ども數多たびになりぬ。かゝるほどに、この男病に煩ひて後いくほどなくて終にはかなくなりぬ。女の氣色あるにもあらぬこゝちして悲みのあまりにや、命も絶えぬとぞ見えける。よそに見る人さへ

いとはしたなき程に覺えけり。月日はあらたまれども別れの涙は乾く時なかりけり。父母いかにして忘るゝ草の種をだに取りてしがなと思へど、更に叶ふべくも見えず。この時に同じ里に住みける郭楽といふ人世に取りて賤しからず、時に用ゐられたり。この男思の外に年比住み渡りける妻はかなくなりて、歎きやうやうをこたるほどに、この女をあはれいかでかと思ふに、堪へぬ氣色いろに出でぬ。これによりて父母煩ひなくゆるしてけり。この女悲しと思ひて様々にあるまじきよしをねもころにいひけれど、「親の心にまたがはぬは限なき罪とは知らずや。みづからの心にこそふさはしからずは思ふとも、いかでか親の本意をばたがふべき」など猶言ひけるに昔の男よりも、生ける親のことは愚に覺ゆる、ことわりにまげてなまじひに出で立ちつゝ今の男の許へゆくゆくも袖の雫乾くまもあかりけり。かゝりけれども、男の家近くなりければ色かたちを改めて、喜びたるけしきになりぬ。車よりおりつゝなよらかに歩み入りて、帳の前に火をろくかきたてゝうち居たる事柄氣色をみるに、嬉しく覺ゆる事限あり。又物など見たるに言葉につけても耻かしくつゝましくのみ覺えて、忽にまぢかく寄るべき心ちもせず、臆せられてやゝ久しくなる程に、鐘もうち八聲の鳥の聲々鳴きわたりぬれば、この女何となくすべき事ありがほにもてなして、身に親しき女房一人二人を具してはしの妻戸の内に入りぬ。かくて後いたくうちなきて、女房に語りていはく「我昔の契を思ふに、時の間も堪へ忍ぶべき心ちせず。さりながら父に背ける罪を恐りてなまじひにこゝまでは來たれど、生きながら二人の人に契を結ぶべきことわりなければ、今はか

ぎりの我が身とは知らずや」とて、

「親にこそそむかぬ道にいりぬともわかれふるさちぎりをいかゞわすれむ。生きては一つゆかの交絶ゆる事なく、死なば又同じつかの塵にもなりなむと誓ひし事は、中有の旅の空にも思ふらむ。我又忘れめや」といひはつれば、らうたきまなじりより紅の涙流れ出づるけしき、まことににはひ殊なる八重紅梅の春のあしたの雨にまをれて、よそはひさびしきに通ひたり。かくてまばしばかりあるに、身の有様をや思ひ定めけむ、指より血を出して妻戸のうへに書きていはく「我がかばねをば隠瑜が墓の傍に置け」と書きつくるに、人の氣色のまければ、さわぎてはての文字二つ三つをば書きさしつ。みづからの帯を解きてくびを引さまとひてはかなくなりぬ。

「くれなゐの涙にまがふ水ぐきのするをだにこそかきもながさね」。暫しあれば絶え入りぬ。女房かゝへて泣きをれども、いふかひなくて明けぬれば、男入り來て見るに、いかゞおぼえけむ、暫しばかり死に入りておきもあがらず。

「我さへや慕ひやまなむ契りける人ゆゑ人のたゆるいのちに」。時の人々泣き悲みけり。この女は潁川の荀爽がむすめ南陽の隠瑜が妻なり。今の男は太子師郭奕といふ人なり。

むかし、上陽人上陽宮に閉ぢ籠められて、多くの年月を送りけり。秋の夜春の日あけくれ、月の光、蟲の聲より外に又さし入りおとなふ人あかりけり。嵐にたぐふ紅葉の錦百轉の鶯の聲も、我がためはいと情なき心ちす。夜の雨窓を打つ音にも、愁の涙といまさらけり。

「いといしくなぐさめがたき秋の夜に窓うつ雨のおとぞわりなき」。この人昔うちに参加けるに、そのかたち華やかにをかしげなるを頼みて、楊貴妃などをも争ふ心やありけむ、一生終に空しきゆかをのみ守りつゝ、花のかたちいたづらにをれて、ぬば玉の黒髪白くなりけり。

昔、漢の元帝と申す帝おはしましけり。三千人の女御后のなかに王昭君と聞ゆる人なむ華やかなる。とは誰にも勝れ給へりけるを、この人帝にましかくむつれ仕うまつり給はひ、我等定めて物の數ならじと、數多の御心にいとましく思しけり。この時にえびすの王なりけるもの参りて申さく「三千人まで侍ひあひ給へる女御后、いづれにても一人賜はらむ」と申すに、うへみづから御覽じ盡さむこともわづらひありければ、そのかたちを繪に書かせて見給ふに、人の數にやありけむ、この王昭君のかたちをなむ見にくき程になむ寫したりければ、えびすの王たまひて悦びひらけつゝ、我が國へ具してかへるに、ふるさとを戀ふる涙はみちの露にもまさり、おやはらからに立ち別れぬるなげきは、えげきみ山の行く末はるかなり。かゝるまゝには、唯ねをのみなけども何のかひかはあるべき。

「うき世ぞとかつはゑるゑるはかなくも鏡のかげをたのみつるかな」。哀を知らず情深からぬものゝふなれども、らうたき姿にめでゝかしづき敬ふこと、その國のいとなみにも過ぎたり。かゝれども、ふりにし都を立ち別れにしより今日に至るまで、事にふれをりふしにつけてうれへの涙かわくまもなし。この人は鏡のかげの曇なきをのみたのみて、人の心のにぞ

れるを知らざりけり。

むかし、潘安仁と申す人ありけり。姿有様類ひなくなまめかしく清げにて、そのかたちは、玉などのよく光るやうにぞ見えける。秋の哀を述べて賦に作り、事にふれて情ふかくやさしかりければ、世の中にありける女さながら名を聞きかたちを見るより、またもえのけぶり絶ゆる時なかりけり。車に乗りて道を行くに、道に逢ひける女思ひのあまりにや、橘の枝を採りて、車の物見よりうちになげ入れけり。人ごとにかくまければ、果物車にあまりけり。

「めぐりあふ事もありやとから車つみあまるまで折れるたちばな」。

昔、都に人の娘ありけり。みめかたちなまめかしく美しくかりければ、荒き風にもあてずして深き窓の内にかしづき養はれけり。齡やうやう人となる程に、父母世にあらむ事をかせぎいとなむ。この人これを聞きて、嬉しからず厭はしきまになむ思ひけるを、父母まひて怨み歎きけり。「我もしさる事あらば、唯家を出でかざりをおろして世にもあらじ」などまめやかにうきことに言ひけり。親しきあたりまでも限なく思ひ歎きけれども、心強く思ひ立ちにければ、遂に乳母子なりける者一人を具して、いづ方となく失せにけり。この乳母子も、かたちいとをかしげにて、思ひ放つ人なかりけれども、この人同じ心にて人に見えむ事うるさしとや思ひけむ、鳥の聲もせぬ深き山の中に入りて、おのおの草のいはりを引き結びつゝ住み渡りけるほどに、この女の父母二つなき志ばかりを志るべにて、山林を分けつゝ尋ね來にけり。うち見るまゝに血の涙を流せども、諸共に立ち歸るべき氣色更になし。誰も子を思ふ道

は惑はぬ人なければ、さるべきものなどねもごろに營みやりけるを、猶やうるさしとや思ひけむ、又「すみかを改めて、はかへ逃げ失せむ」などいひければ、唯二人の心に任せて過ぐさせける程に、其の後おともせざりけり。かくてふかき山のなかに心をすましてあかしくらすに、斑なる犬の美しくげなるがいづこよりとも見えで、この乳母子のいはりの前に、尾うちふりて居たりけるを、物などくはせて撫で興じけるに隨ひて、この犬殊の外になれむつれけり。つれづれなるまゝに懷になどうち臥せて、唯これを愛し弄びつゝ、明し暮しける程に、いとむつかしく心亂れて、あらぬすぢにのみ物の覺えければ、この犬にうちとけにけり。さるべきさきの世の契や深かりけむ、犬のいとほしさ限なく覺えけるを、我ながらあさましく心憂くぞ思ひ知られける。かくてまうの居たる所へ來て、さしかた行く末のことなむうち語らひつゝ居たりけるに、夏の衣曇りなく透きたるより、この乳母子の肩に犬の足跡あまたつきたりけるをこの人見つけてけり。「それはいかなる事ぞ」と尋ねとひければ、ありのまゝにいはむも心憂くけしからず覺えて、何かと言ひまぎらはすを、まひてせめ問ひければ、あらがふべきかたなくて「我がる所をさりげなくて時々見給へ」と教ふるを怪しと思ひながら、その後は常に窺ひ見るに、たえてこの犬と二人ねたり。この人これを見るに、すべて堪ふべくも覺えず侍るを、まづはこゝろもとなく侘しかりければ、忽にその犬を呼び取りてあひにけり。おもはしく悲しくぞおぼえける。

「あさましやなどけだものになちとくるさこそ昔のちぎりなりとも」。人の身にして犬に

契を結びける、類ひなき程のことなれば、物の心を知れらむ人はこれをもうとむべからず。
いかばかりかはこの道に入らじと思ひ取りしかど、契の深きにあひぬれば、かしこきもはか
なきも、さながら遁れがたきことにや。この犬の名をば雪々とぞいひける。

唐

物

語

終